

1. 視察の目的

【ドイツ】

- ・歩行者優先のトランジットモール建設による低炭素なまちづくりと中心市街地活性化の両立
- ・広域行政体による公共交通政策の推進と人が集まるまちづくり
- ・CO2 排出量削減のための市民参加型環境政策の推進と環境先進都市構築の経緯と概要

【フランス】

- ・電気自動車・プラグインハイブリッド車導入促進による低炭素なまちづくり
- ・都市部過密緩和のための副都心の形成と都市デザイン

2. 視察都市

ドイツ：ダルムシュタット、マンハイム、ハイデルベルグ

フランス：パリ、マラコフ

3. 視察期間

2009年10月18日（日）～10月25日（日） 《8日間》

4. 視察内容

1) はじめに

09年10月18日（日）から25日（日）まで、公職研が行う「地方公務員のための職員研修・海外派遣」事業の一つである「欧州都市計画・低炭素なまちづくり調査団（ドイツ・フランス）」に参加した。参加者は私を含め5名であったが、同じ日程で他の調査団（2名）と同行したため、7名で団を構成することとなった。

出発日の成田空港で初顔合わせとなった調査団の面々は、50才代前半の東京都下の市公園緑地課長、30才代前半から後半にかけて宮崎県の農業青年、大分県の市都市計画課職員、静岡県市の農業振興課職員、大阪府第3センター職員、石川県都市計画課職員の6名と私の7名であった。

初顔合わせ時に団長・副団長を選ぶこととなり、最年長者（61才の私）を団長に、最年少者を副団長とすることが決められた。一団員として視察に参加すればいいのだろうと思っていた私は、この時から10月25日（日）の帰着日まで、この視察団の団長を務めることになった。

それからの一週間、至らぬ団長を支えていただいた団員各位の皆様と添乗員に心から感謝を申し上げます。

2) ドイツ・ダルムシュタットを視察（10月19日10:00~12:20）

《調査テーマ》

- 都市計画制度の概要と大型ショッピングモールの中心市街地への誘致
- 中心市街地における歩行者中心のトランジットモール建設の概要
- 低炭素なまちづくりへの取組

ドイツは先進的な都市計画制度のモデルといわれており、その中で30年前に旧市街地の再整備が計画され、現在に至っても新たな計画が継続しているダルムシュタット市（14万2千人）の都市計画について、「調査テーマ」に基き調査を行った。

ドイツでも1960年代以降、大規模小売店が郊外に進出しはじめ、旧市街地の商店街の衰退が社会問題となった。ダルムシュタットのケースは、郊外に進出を図ろうとする大規模小売店を逆に旧市街地に誘致し活性化に成功したものである。

〈第1次整備：ルイーゼン広場及びルイーゼン・センターの計画〉

1970年代初め、郊外に65,000㎡という大規模小売店計画が持ち上がった。この規模は当時、市の中心部にあった4つの中型百貨店の売り場面積を合わせてもこの規模には満たないという大きさで、この計画が実現すれば商店街の衰退は目に見えていた。

計画を知った市都市計画局は、市議会の協力をえて旧市街地のルイーゼン広場に面した土地の売却を条件に、大規模小売店を郊外から市街地へ誘致した。

市はこの誘致に合わせてルイーゼン広場周辺の大改造を行っている。旧市街地を縦断していた市道をトンネル化し、東西に通る国道を迂回させることで、ルイーゼン広場を中心とする一帯は自動車が締め出され、公共交通機関のみが運行するトランジットモール化され、巨大地下駐車場を併設する歩行者天国となった。